

言語使用の動態

—— 揺れが見られる現象の世代差に即して ——

大橋 純一

Dynamic State of Language Use: Tracing Generational Differences about Variation in Linguistic Phenomena

OHASHI, Junichi

Abstract

The language use of Modern Japanese is subject to variation, and how the language will change from now on requires our attention. This paper deals with the following three themes: (1) variation in the orthography of foreign loan words, (2) the differentiation between the use of foreign loan words and that of native and Sino-Japanese words, and (3) grammatical errors and grammaticalization, and seeks to clarify the current issues found in each of them. To that end, first, the realities of such variation in language use as observed in daily life is investigated based on linguistic data from publications, newspapers and online articles, etc. These variations are classified by type according to their characteristics while referring to existing research. Next, a questionnaire survey is carried out regarding language use in (1) to (3), and, by gaining an understanding of the how language use varies in each generation, an analysis is made of the backgrounds against which these variations occur, and the predicted future trends.

Key Words: variation of language use, orthography of foreign loan words, use of foreign loan words, grammatical errors and grammaticalization, generational differences

キーワード: 言語使用の揺れ, 外来語表記, 外来語使用, 文法の誤用・派生, 世代差

はじめに

現代語には使用に揺れがあり, 今後の変化を注視すべきものがある。同時にそのあり方を探るために, 継続的な実態観察が有益と思われるものがある。本稿では, それらから以下のものを取り上げ, 各々の使用の現状を世代別の調査から考察する。

- (1) 外来語表記の揺れ
- (2) 外来語と和語・漢語の混用
- (3) 文法の誤用と派生

以上は後掲の「参考文献・URL」にも見られるように, 文化庁の調査・審議はもとより, 製品やサービス, 放送, 報道など, 各種業界での実際の言語使用とも関わり, 現状がどうなっているのか, それらにどう対処すべきなのかが重要な関心事となっている。つまり研究対象としてばかりでなく, 実生活レベルでの, いわゆる国字問題の検討課題として, データ収集の必要と意義をみとめるものといえる。またそれと関連して, 以上は大橋 (2010) でも部分的に扱ったところがあり, 当時の若年層の実態

について, いくつか参考にできるものがある。(1)～(3)を対象とするのは, 主にそのような理由による。

本稿では以下, まずは日常にどういった揺れや誤用, 派生的な言語使用が観察されるかを各節で例示・分類しつつ, いくつかの観点を設け, 世代別に収集する調査項目を決める。その際, 先行の調査や議論の内容も適宜参照する。^{注1} そのうえで, 設けた観点により行ったアンケート調査から, それぞれの世代別の状況を把握し, 各実態の背景や予測される今後の動きなどを考察する。^{注2}

1. 調査の概要

日常に観察される言語使用の揺れについては, 主に卒業研究でそれを扱った山浅 (2019) を参考に例示し, そこに筆者が実際に現物などにあたって確認した類例を加味して特徴のタイプ分けを試みる。

世代別のアンケートは, 2020年6～8月, 10～11月の2回にわたり, 若・中・高年層503名 (各175・172・156名) を対象に行った。回答者は半数以上 (6～8月

調査)が秋田大学生^{注3} およびその両親・祖父母であることから、年齢区分はおおよそ20歳前後(若年層)、40～50代(中年層)、70～80代(高年層)と見ることができる。これを目安に、残りの約半数(10～11月調査)は本学卒業生、老人会などに協力を仰いだ。回答者数が各世代で完全には一致しないため、以下には実数ではなく、パーセンテージにより実態を見る。アンケートは2択または3択の選択肢から該当する1つをチェックしてもらう形をとっている。各個人のデータで、特定項目にチェック漏れが見られる場合があるが、これをもってすべてを対象から省くことはせず、当該項目のみを除外して集計に加えるものとする。そのため、(実数での扱いではないため視認されるものではないが)、項目や世代によっては回答総数が他と異なる場合がある。

2. 外来語表記の揺れ

2.1 いくつかの指針

IT・ビジネス用語をはじめ、特に新進分野での専門用語の増大に伴い、日常において外来語を目にする、あるいは実際に使用する機会が格段に増えてきた。その中には、従来の「主として欧米語からはいつてきた語」(『大辞林』第四版)のような認識の枠では説明が難しいものも多く存在することだろう。この事態は、おのずとその外来語を原音に近づけて記すべきか、日本語の慣例的な発音に寄せて記すべきかの問題に通じる。要は「格段に増えてきた」ものの分だけ、表記のバリエーションとそれに付随する揺れの実態があることが推測される。

そうした中で、国が示す方針、各業界での対応、受け止め方はどのようになっているだろうか。管見のものをいくつか抜粋しながら確認してみる。

1) 文化庁『外来語の表記』

平成3年6月28日に内閣告示された『外来語の表記』の「前書き」には次のような記述がある(波線は筆者)。

- ・現代の国語を書き表すための「外来語の表記」のよりどころを示す。
- ・各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。
- ・固有名詞など・・・でこれによりがたいものには及ぼさない。
- ・過去に行われた様々な表記を否定しようとするものではない。

また「本文」には次のようにもある。

- ・特別な音の書き表し方については、ここでは取決めを行わず、自由とする。
- ・語形にゆれのあるものについて、その語形をどちら

かに決めようとはしていない。

- ・語形やその書き表し方については、慣用が定まっているものはそれによる。分野によって異なる慣用が定まっている場合には、それぞれの慣用によって差し支えない。

これらによれば、以上は強制力を持つものではまったくなく、現代語における表記の「よりどころ」を示すことが基本方針となっていることが明白である。

ちなみに外来語表記については、これに先立ち、昭和29年に「国語審議会・表記部会」が審議結果を報告している。その「まえがき」には、

- ・国語化した書き表し方の慣用が固定しているものは、これを探る。
- ・その書き表し方の慣用が固定せず、二様にわたるものについては、原語の発音としてわれわれが聞き取る音を基礎とし、国民一般に行われやすいことを眼目として、なるべく平易なほうを探る。

とあり、当時揺れのあるものに関しては「平易なほうを探る」ことに眼目があったと考えられる。逆にいえば、これ以降の外来語使用の劇的な変化に伴い、表記の指針が「統一」から“目安”に、本心を探ればひとまず“様子見”の方向へとシフトしたことがうかがえる。

2) 一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会『外来語(カタカナ)表記ガイドライン 第3版』(PDF)

テクニカルコミュニケーター協会(略称 JOTA)は、「製品やサービスの使用説明を扱う専門家の団体」(HPより)であり、これまでも日本語のライティングスキルを中心にいくつかの指南・提言を行っている。当協会が2015年に外来語表記に関わるガイドラインを制定しているが、その冒頭に次のような記述がある。

- 本ガイドラインの目指すところ

- 1) 利用者が見聞きするときにわかりやすい表記であること
- 2) 音声(Universal Design)対応にふさわしい表記である(読み上げたときに日本語として聞き取れる、聞き間違いが無い)こと
- 3) 見聞きする人のスキルを限定しない(製品の利用者が技術者だけではないことを考慮する)
- 4) 製品(専門色の強い製品と大多数人が使う製品の)間の垣根がなくなることに対応する(一般的な知識で複雑かつ高度な機能を使いこなせるように)

(以上、p.4より抜粋)

これによれば、誰にも分かりやすく読んだときに聞き間違いがない表記であること、利用者の垣根がない表記であることが、当ガイドラインの中核であると受け取れる。なお個別の箇所を見ると、「原語の「V」音には「バ」

「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」を充てる」(p.15) といった記述があり、表記を思い切って統一する方針がうかがえる一方、「例外」を設けて臨機応変に対応する姿勢も見られる。また最初に『外来語の表記』(内閣告示)を抜粋しているほか、「はじめに」に辞書や手引き書を参考にしていて旨の注記があること、日本産業規格の『JIS Z 8301』に抵触しない旨の断りがあることなど、全般には慎重を期したガイドラインであることもうかがえる。

3) メディア

NHK 放送文化研究所がおおよそ月 1 回の頻度で開催している「放送用語委員会」において、外来語表記の問題はしばしば審議されている(その議事録はNHKのHP上で公開されている)。また新聞・記者が標準と定める表記については、朝日新聞社用語幹事編(2019)、一般社団法人共同通信社(2016)などが参考になるほか、新聞各社が自社の表記方針を記事にしていることもあり、それらも参考になる。詳しい引用はしないが、これらはいずれも大きな方向性を規定しながらも、使用の実態や動向を見ながら、個別に対処する方針のものと見られる。

2.2 日常における揺れの実態

山浅(2019)は外来語表記の揺れについて、製造メーカーごとに記載が異なるもの、書籍・雑誌・web記事などで表記が2種類以上に現れるものを抽出し、それをYahoo! ブログ^{註4}内での使用例、検索ヒット数により比べることで、大局的な揺れの現状を捉えようとした。以下には、主にこれを参考とし、また筆者も現物にあたって類例を探ったうえで、主要なものをタイプ別に整理してみる(後述のとおり、表記の傾向は接続語の有無により異なる場合があるが、紙幅の都合上、例示する語形は原則当該部分のみとする。同じ理由により、引用媒体も省略する)。なおこの問題を論じるにあたり、小椋(2013)は「コンピューター-コンピュータ」を引き合いに「語表記のゆれか発音のゆれかの判定が難しい」(p.824)ものがあるとする一方、宮島・高木(1984)にならって「外来語表記のゆれとして扱う」(p.825)ことを指針に挙げている。本稿もその見地から、語表記が現に複数にまたがってみとめられるものは、基本的に表記の揺れとして扱う。そのうえで、発音の揺れの反映か否かが重要な意味を持つと見られる場合は、その時点でそのことを指摘する。

・長音/φ(ゼロ)

へ(アー/ア), ハロ(ウィー/ウィ/ウイ)ン, ユー(ザー/ザ), ティ(シュー/シュ/ツシュ), コンピュー(ター/タ), モニ(ター/タ), アダブ(ター

/タ), ルー(ター/タ), プリン(ター/タ), コミュニ(ティー/ティ), セキュリ(ティー/ティ), スパゲ(ティー/ティ/ツティ), ボ(ディー/ディ), キャン(ディー/デー/ディ), スキャ(ナー/ナ), サー(バー/バ), ドライ(バー/バ), ソ(ファー/ファ), ワイ(ヤー/ヤ), メモ(リー/リ)

・長音/連母音[e:/eiほか]

メ(ー/イ)ク, プレ(ー/イ)ヤー, ディスプレ(ー/イ), プレ(ー/イ)ク, アイプロ(ー/ウ), ボ(ー/ウ)ル

・拗音/直音[ウィ/イほか]

ス(ウィ/イ)ーツ, サンド(ウィ/イ)ッチ, (ウィ/ウイ)スキー, (ウィ/ウイ)ルス, (ウエ/ウエ)ディング, (ヴィ/ビ)ジュアル, (ヴァ/バ)イオリン, (ヴェ/ベ)ネチア, アイ(ディ/デ)ア, (ディ/デ)ジタル, テレ(フォ/ホ)ン, ヒン(ドウ/ズ)ー

・清音/濁音

バッ(グ/ク), ドッ(グ/ク), ドラッ(グ/ク), ビッ(グ/ク), ベッ(ド/ト), パッ(ジ/ヂ/チ), パッ(ド/ト), ドッ(ジ/チ)ボール

・その他

ピ(ザ/ツツァ)

このように、用例は挙げれば際限がなく、上記はその一例に過ぎないが、以上にブログの検索ヒット数(山浅2019)を参照し、揺れの実態を特徴別に整理すると、大きくは次のものが抽出できる。^{註5}つまり①使いわけに大きな傾向を見出しがたいもの(コンピューター/コンピュータなど), ②当該音の位置(語中・語尾)により表記に一定の傾向が見られそうなもの((ナチュラル)ヘアー/ヘア(スタイル)など), ③個人の嗜好やこだわりのようなものが関係しそうなもの(スパゲティー/スパゲティ/スパゲッティなど), ④対象をどういう価値のものとするかが関係しそうなもの(ティシュー/ティッシュ/ティッシュなど), ⑤発音レベルにおける原音の定着度合いが関係しそうなもの(サンドウィッチ/サンドイッチなど), ⑥外来語形の表記が対象に応じて習慣化していると思われるもの(ボール/ボウルなど), ⑦その指す対象の性質や種類の違いにより表記の使い分けがありそうなもの(ヴィジュアル/ビジュアルなど), ⑧その事物の特殊な事情が関係しそうなもの(ヒンドゥー/ヒンズーなど)である。^{註6}

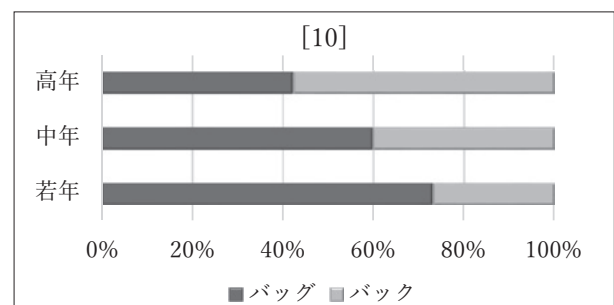
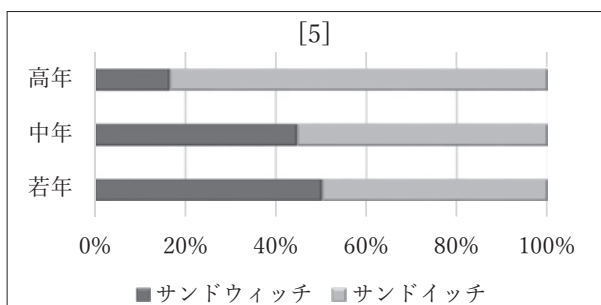
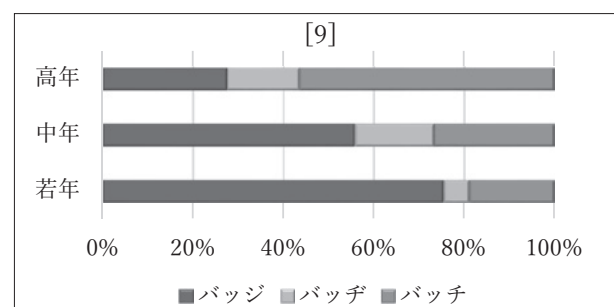
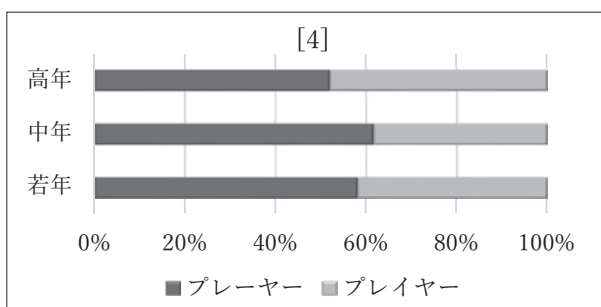
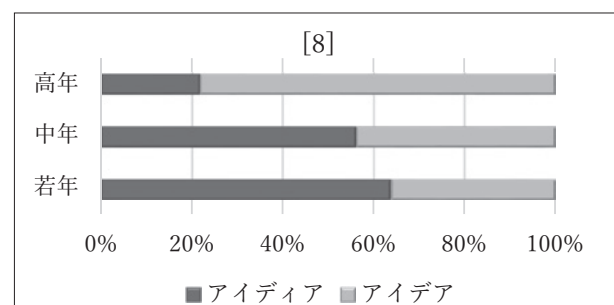
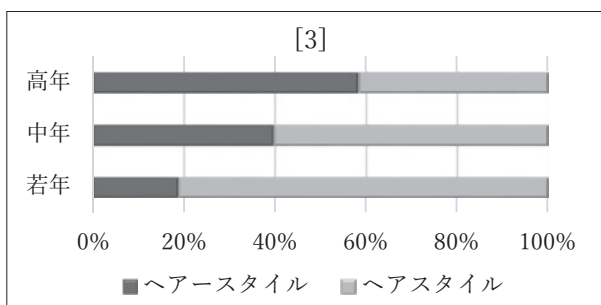
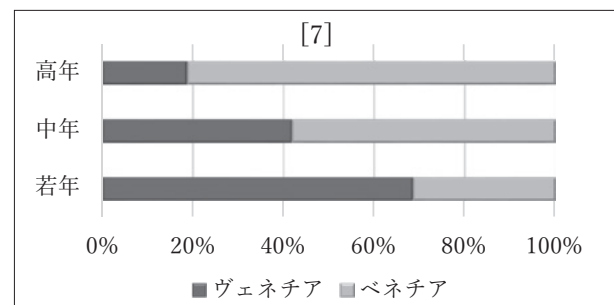
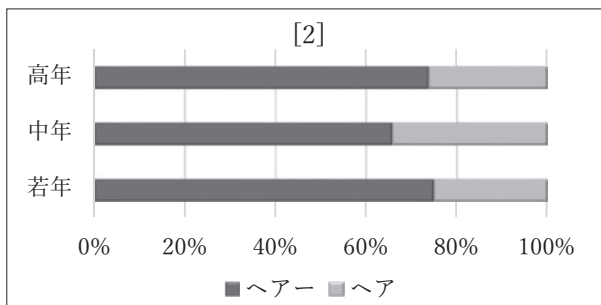
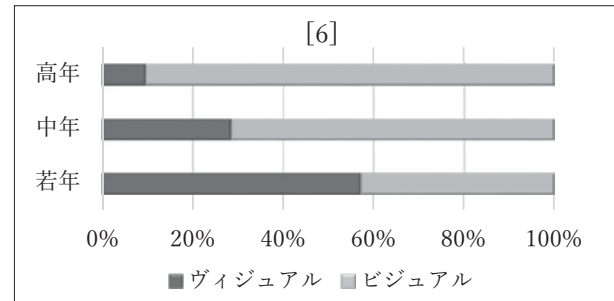
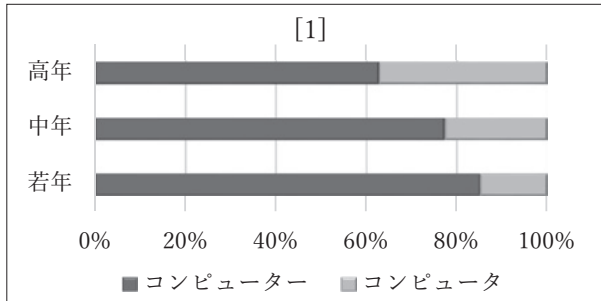
以下にはこれをもとに、浮動の要素が強い①、逆に一定の傾向性が推測できる②⑤⑦を中心に、次の外来語を取り上げる。

・長音/φ: コンピューター/コンピュータ, ヘアー/ヘア(語中・語尾)

- ・長音／連母音：プレーヤー／プレイヤー
- ・拗音／直音：サンドウィッチ／サンドイッチ，ヴィジュアル／ビジュアル，ヴェネチア／ベネチア，アイディア／アイデア
- ・濁音／清音：バッグ／バック，バッジ／バッヂ／バッチ

2.3 世代別状況

ここでは上記の各外来語について，調査結果をパーセンテージに換算して対比する。グラフでは揺れを示す2～3の表記を凡例に掲げ，それらの各比率を世代別に図示している。



まず“長音/φ”中の「コンピュー（ター/タ）」であるが、一見して「コンピューター」が優勢である。特に若年層では85%がそれであり、少なくとも揺れの傾向にあるとは見なされない。先の媒体調査(ブログ検索)で拮抗タイプ(①)と見られた当語であるが、こうも偏った結果を示すのは如何なる理由によるだろうか。ひとつ考えられるのが、注3にも記したとおり、当世代の回答者の大半が本学部生であることとの関連である。学生たちは所属分野の性質上、IT・情報系または機械・工学系といった知見からコンピュータ(一)との関わりを持つ層とは異なる。おそらくそうした属性の偏りが、不特定を前提とするブログ検索との差を生じさせている要因だろう。一方、世代的に見ると、各比率が若～高年層にかけて20%ほどの差を示しており、3世代の中では比較的高年層が「コンピューター」を多用する傾向にある。これは一見すると-タ～-ターへの世代変化を示唆するかにも見えるが、私見ではそうした動きとは異なり、むしろ拍の独立性が弱いとされる当(東北)方言・当世代話者の発音事情が影響していることだと思われる。

同じく“長音/φ”より「へ(アー/ア)」と「へ(アー/ア)スタイル」の場合を見ると、先の「コンピュー(ター/タ)」とは傾向がまた大きく異なる。既に媒体調査からも推測されたことであるが、まさに上記の②の分類と合致し、語中・尾環境に基づく傾向の差が明確に現れる結果となった。つまり「へア(語尾)」と「へア(語中)」の差であり、それはとりわけ若年層において著しい。

一方、“長音/連母音”の「プレ(ー/イ)ヤー」であるが、全般には「プレーヤー」が優勢と見られる。とはいえ、それは長音表記が連母音のそれを一方的に淘汰する動きとは見なされない。とりわけ高年層がプレー-とプレイ-とで相半ばする中、中年層と若年層とでその増減の比率をわずかながらも反転させていることなどは、この表記の揺れの現状を物語っているといえる。

次に“拗音/直音”について、「サンド(ウィ/イ)ッチ」,「(ヴィ/ビ)ジュアル」,「(ヴェ/ベ)ネチア」,「アイ(ディ/デ)ア」を順に通して見てみる。ここで、まず大きく捉えていえることは、高年層がどれをとっても拗音表記にはあまり馴染まないと見られること、一方で中年層、それよりもさらに若年層と、世代が下るにつれてウィ・ヴィ・ヴェ・ディの表記が増大しているように見えることである。しかしその増大の幅が語によっていくらか異なる。たとえば「アイディア」や「ヴェネチア」(若年層)は65%強がそれを占め、直音との優劣の差が明確化しつつあるのに対し、「サンドウィッチ」は中年層で-ウィの浸透が明白ながら、若年層にかけてがそれに比例せず、未だ-ウィと-イのどちらにも行きかねない動きのものと捉えられる。後者の場合、しばらくはこの

両表記が個人間ないし個人内で拮抗する状況が続くのではないか。なお「(ヴィ/ビ)ジュアル」に関しては、本調査では“-系バンド”と、バンド奏者の容姿やファッションに焦点化した文例の中で聞いている。すると若年層の60%近くが「ヴィジュアル」であり、過半数が拗音の方を回答する結果となった。高・中年層との対比からも、これには当世代ならではの嗜好、関心事、接する世界などとの関わりが大きく影響しているものと思われる。

最後に“濁音/清音”について、「バツ(グ/ク)」と「バツ(ジ/ヂ/チ)」を見てみる。すると世代的には階段状の推移が見られ、いずれも清音(高年層)～濁音(中・若年層)へと表記の主体が転換されていく動きと見てとれる。-ッグや-ッジ(ヂ)といった“促音+濁音”の音構造は、調音原理からして元来、(東北方言の高年者においてはなおのこと)、発音しづらいもののひとつといえる(大橋2002ほか)。これらから、高年層が純粹に自身の発音習慣に準じた結果と見られるのに対し、中・若年層(特に若年層)は生活の中で文字媒体に依存するところが大きく、視覚的な認識の面が発音のそれに優先されつつある姿と解される。

3. 外来語と和語・漢語の混用

3.1 先行の調査

これに関しては、国立国語研究所がWeb上で公開している『「外来語」言い換え提案』(閲覧時2007.6.12最終更新)が調査の規模からしても、その内容から見ても、もっとも充実している。しかし、当サイトのはじめに「公共性の高い場で使われている分りにくい「外来語」について、言葉遣いを工夫し提案することを目的とする」とあるように、その趣旨は“分りにくい「外来語」の選別”とそれの“言い換え提案”にあると考えられる。田中(2013)の「言い換え」をめぐる論も基本的にはその趣旨に則るものといえるだろう。他方、金(2020)は「クレーム」という個別の外来語を取り上げ、これが「苦情・文句」などの類義語とどう関連し、また当語の上位語(基本語)化を阻む背景が何なのかを論じている(金には他に「トラブル」「ケース」「チェック」などの語を対象とした論考がある)。既述のとおり、本稿の主眼は揺れや混用の動態にあるので、前二者が扱う“分りにくい(それゆえに言い換えられるべき)外来語”というよりは、むしろ後者が注目する“日本語の語彙体系に分け入ろうとする(場合によっては上位語化さえし兼ねない)外来語”がターゲットとなる。

3.2 日常における混用の実際

以下には、山浅(2019)から一部混用の例を引用す

るが、その各実態をブログの検索ヒット数を参考に整理すると、大局的な傾向としてはあるが、いくつかのタイプに分類されるように思われる（前節と同様、語形のみを抽出し、個々の出典も省略する）。

i. 使用割合の差が小さいもの^{註7}

シナリオ／脚本、コンセプト／概念、キャンディー／飴

ii. 使用割合の差が大きいもの

1) 外来語が優勢なもの

スタジアム／競技場、アスリート／運動選手、リベンジ／雪辱、モチベーション／動機づけ、コミュニティ／地域社会、キッチン／台所、ピンポイント／的確、ストイック／禁欲的、スキル／技能、シェア／共有、^{註8} サプリメント／栄養補助食品、ランチ／昼食、リング／指輪、ドア／戸（扉）、スパイス／香辛料、ハンガー／えもんかけ、シーツ／敷布

2) 和語・漢語が優勢なもの

展望／ビジョン、衝撃／インパクト、立場／スタンス、教科書／テキスト、過程／プロセス、精神面／メンタル面、資料／レジュメ、流行／トレンド、夕食／ディナー、靴／シューズ、買い物／ショッピング、色／カラー、舞台／ステージ

iii. 使用割合に特別な事情が関わりそうなもの

ケア／手入れ（ケア→心身、手入れ→肌・物質）、ライス／ごはん（ライス→皿（洋食）、ごはん→茶碗（和食））、コミック／漫画（コミック→主に業界人、漫画→主に一般人）、スプーン／さじ（スプーン→対象そのもの、さじ→「さじ加減」「ひとさじ」などの慣用表現で多用）、サポート／支援（語構成上の制約<○支援物資、×サポート物資>）、アクセス／交通（同<○交通事故、×アクセス事故>）、コラボ／共同制作（使う場面や属性の差の反映<コラボ：音楽や映像、私的イベントを背景とする／共同制作：公共の団体や学校現場を背景とする使用>）、（ペン）ケース／筆箱（志向や経験的なことによる個人差の反映<（ペン）ケース：布製 or 箱型／筆箱：同>）

以上はあくまでブログ検索という特定条件下での分類であり、注意が必要であるが、その点を踏まえつつ、改めて混用の特徴を整理すると、大きくは次のものが抽出できる。つまり①外来語と和語・漢語とで使用が拮抗しているもの（シナリオ／脚本など）、②揺れはあるが、外来語か和語・漢語のいずれかの使用が優勢であるもの（スタジアム／競技場、展望／ビジョンなど）、③早い段階で外来語に特化され、定着しているもの（ハンガー、シーツなど）、④（比較的新しい語ではあるが）、^{註9} 外来語にほぼ特化され、定着し、逆に和語・漢語でどう言

うかが特定しがたいもの（ピンポイント、ストイックなど）、⑤外来語と和語・漢語とで意味のすみ分けがありそうなもの（ライス／ごはん、コミック／漫画など）、⑥その⑤のうち、両語の指す対象に個人差がありそうなもの（（ペン）ケース／筆箱）である。また以上に加え、⑦外来語と和語・漢語の意味が必ずしもイコールではなく、語の選択が文脈などに依存するようなものも見られる。たとえば「スタンス／立場」において、「立場」が「己の立つ位置や地位・境遇」といった客観的存在の意味を主体とするのに対し、「スタンス」が「態度・姿勢・考え方」といった主観的ニュアンスを含意するように思われることなどがそれである（そういう点では意味のすみ分けがあるともいえ、⑤に類するタイプとも考えられる）。

以下にはこれをもとに、使用割合に優劣の差や意味のすみ分け、個人差が見られそうな②⑤⑥を中心に次のものを取り上げる（語の選択が文脈に拠る側面もあるため、調査文をそのままの形で記す）。^{註10}

身体（ケア／手入れ）を怠らない、肌（ケア／手入れ）をする、高齢者を（サポート／支援）する、画像を（シェア／共有）する、（ドア／戸）の開け閉め、講座で（レジュメ／資料）が配られる、結果よりもその（プロセス／過程）が大事だ、柔らかい布の（（ペン）ケース／筆箱）、硬いプラスチックの（（ペン）ケース／筆箱）

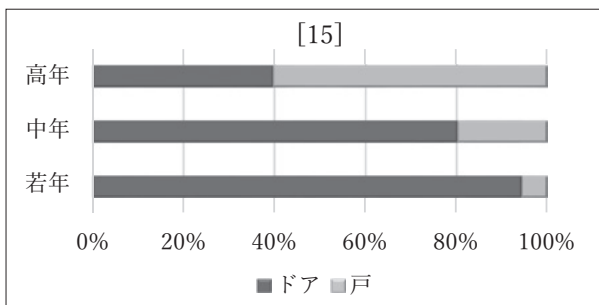
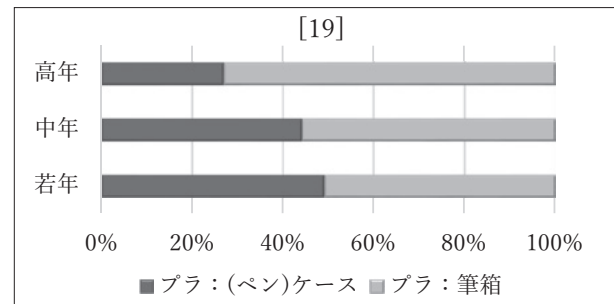
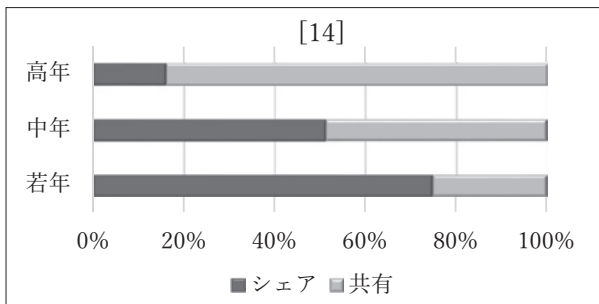
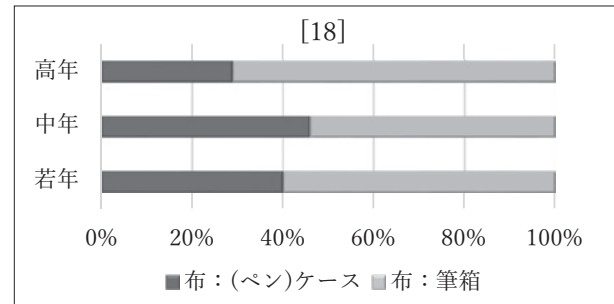
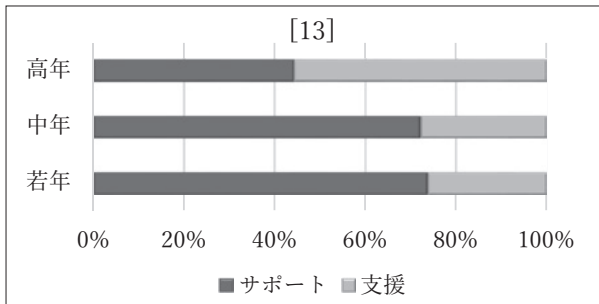
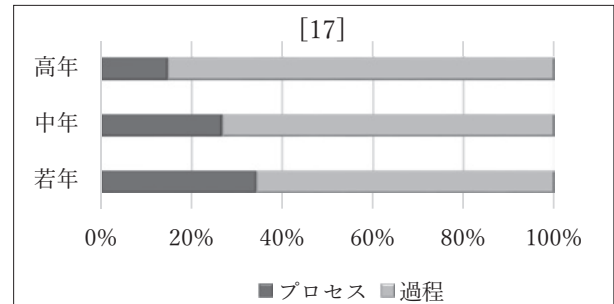
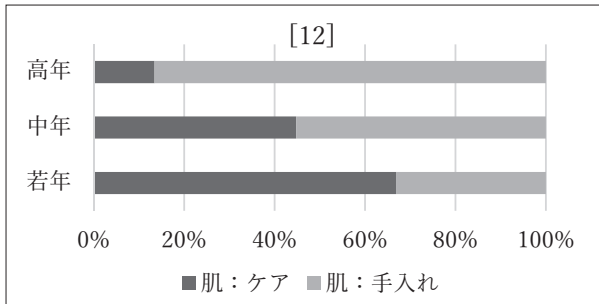
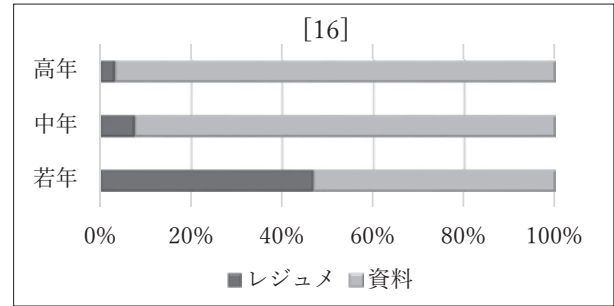
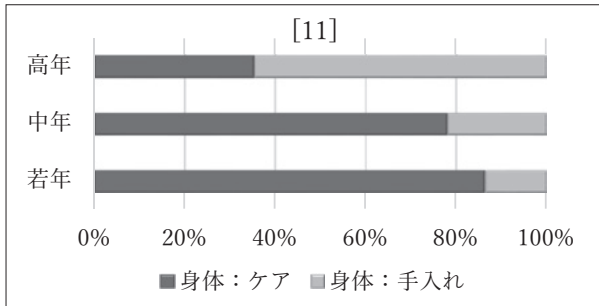
3.3 世代別状況

グラフは前節と同様、混用の2語を凡例とし、その各比率を世代別に図示している。

これをもとに、まずは「ケア／手入れ」（「身体」と「肌」）の2つを見比べてみる。すると、いずれも世代を下って「ケア」の使用が増大していること、しかしそれは「身体」の場合に一層顕著であり、「肌」では逆に「手入れ」の押し戻しがあることがうかがえる。とりわけ高・中年層では「身体→ケア」～「肌→手入れ」への落差が大きく、「ケア／手入れ」する対象により、おおよそ語の使い分けのあることが見てとれる。これには「お肌の手入れ」のような表現が、特に上位世代において、昔ながらの慣例的な言い回しとなっていることが関係しているだろうか。また一方で、「身体」の「ケア」が高年層にもそれなりにみとめられるのは、「デイケアサービス」など、生活の中でそれとの関わりを持つ（あるいは見聞きする）機会が増えてきていることが影響しているものと思われる。

その関連で見ると、「サポート／支援」も上記と似た事情をうかがわせる。グラフのとおり、この混用については中・若年層で「サポート」が優勢であり、先のプロ

言語使用の動態



グ検索における iii の分類（語構成上の制約から「支援」が優勢）とは対照的であることがまずは特筆される。しかしそれ以上に注目されるのは、高年層がやはり 50% にも迫る頻度で中・若年層的な「サポート」を回答していることである。調査文が“高齢者を（サポート／支援）する”であることから、人によっては文例を自分の立場に置き換え回答することも少なくなかったはずであ

る。おそらく「ケア／手入れ」の場合と同様、生活の中でのそうした関わりや見聞きが、「サポート」の使用を後押ししている面があるのではないかとと思われる（一例として、介護関連施設の HP には、「サポートケア」、「サポート介護」、「高齢者サポートセンター」、「サポート付き住宅」といった例が見られた）。

次に「シェア／共有」、「ドア／戸」を見ると、これらにはおおよそ似たような世代差が観察される。つまり世代を下り、“和語・漢語（共有・戸）”～“外来語（シェア・ドア）”へと転換していく動きが明瞭である。ただしそれは「ドア／戸」の場合がより先行している。特に若年層では 95% が「ドア」を回答しており、もはや「戸」という言葉の選択は、「和室の -」といった形容が伴わない限り、「ドア」に抵抗しうる余力を残していないのではないかと推察される。

これと対照的といえるのが「レジュメ／資料」, 「プロセス／過程」の2つである。各世代を通じて「レジュメ・プロセス」が過半数を超えることはなく, おしなべて「資料・過程」の使用率が高い。中でも高・中年層に「レジュメ」の回答はほとんど見られず, その反動で若年層での比率の伸びが目立つが, それでも過半数には及んでいない。これには, 回答者に一部学校教育課程の学生が含まれていること(学校現場では「資料」が用いられることが多いようだ), また学年でいうと1年次(これも一部回答者に含まれる)が未だ「レジュメ」の語に馴染みの薄いことが影響しているだろう。確認が必要である。なお「プロセス／過程」は, 全体的に見れば, その「レジュメ／資料」以上に外来語使用が抑制的であるといえ, ブログ検索におけるii-2)(和語・漢語が優勢)の分類と合致する結果となった。

最後に「(ペン) ケース／筆箱」(“柔らかい布”と“硬いプラスチック”)であるが, これも既見のiiiに分類されたことと合致し, 全般には「筆箱」が優勢であるとはいえ, 二者間に傾向らしきものがないところにその特徴を見出さう。これは, グラフの結果だけから見れば, “布製とプラスチック製では大して言い方は変わらない”ということになるだろう。しかし細かく見ると, ある人は前後者ともに「ケース(または筆箱)」と回答し, またある人は前者を「ケース(または筆箱)」, 後者を「筆箱(またはケース)」と回答しているなど, その出方は幾通りにも分散し, 人によりけりであることがうかがえる。つまりその総体が, 結果として, 布・プラスチックの差をたまたま見えにくいものになっているということがいえる。こうしたものは, 各個人がこれまでに触れてきた環境や習慣, 自己解釈, 場合によっては地域差にも関わることであるため, あるひとつの指標で語の使用を測れるものではなく, 今後も上記のような実態が継続していくことが予測される。

4. 文法の誤用と派生

言語使用の現状を捉える際は, 文法的な接辞や活用などに関心が向けられることも少なくない。ここではその中から, ①接頭辞「お-」, ②すごい+形容詞, ③ら抜き言葉, ④さ入れ言葉¹¹⁾を取り上げ, それぞれの実態を見ていく。

4.1 先行の調査

①については, 井上(2004)が「お和語, ご漢語, ゼロ外来語」(p.35)の原則を提示しつつ, 後二者のうち「お-」を許容する(その兆しがある)のが漢語である一方, 外来語にはそれがほとんどみとめられないことを

指摘している(文化庁『国語に関する世論調査』<平成8年度>に基づく)。他方, ②③④については, 同じく『世論調査』が経年変化の追跡に役立つが, 他にも「話し言葉コーパス」をもとに数量的分析を行った佐野(2009), 現象の世代・性別・地域差などにも言及した井上・鎌水(2002)などがあって参考になる。注2にも記したとおり, これらは対象者の年齢区分に不十分な点があり, データの性質上の違いを考慮する必要があるが, 本稿の考察では適宜結果を突き合わせ, 参照していくことにする。

4.2 日常における誤用・派生の実際

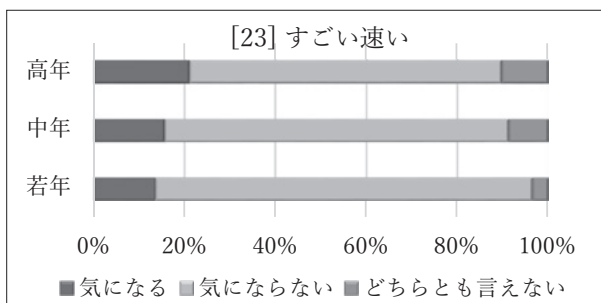
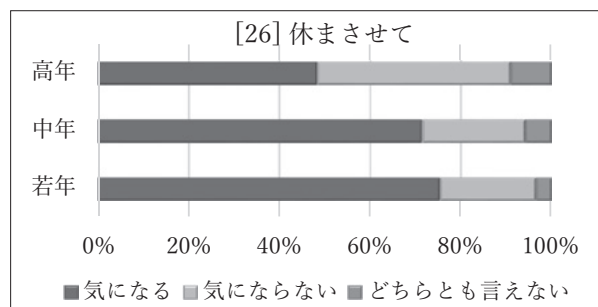
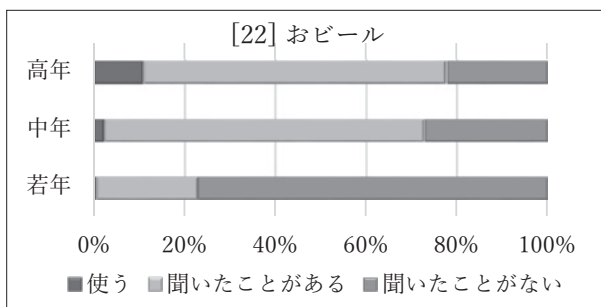
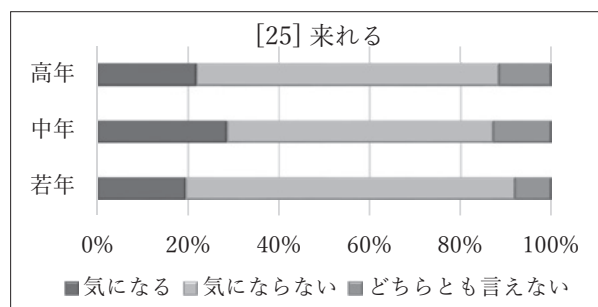
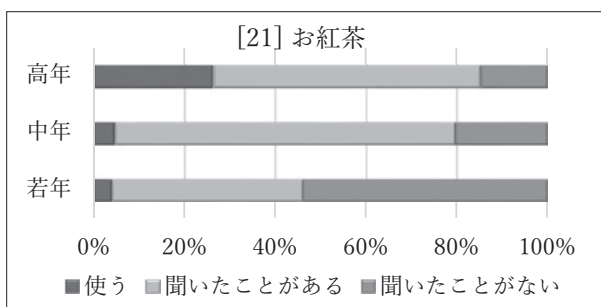
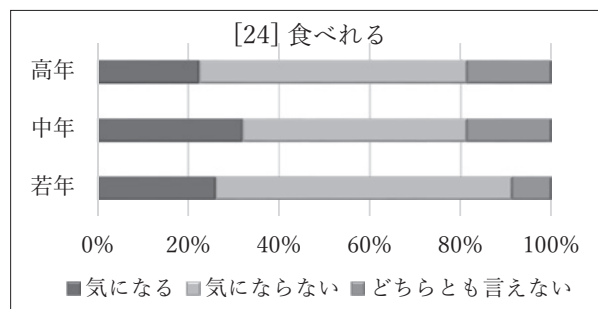
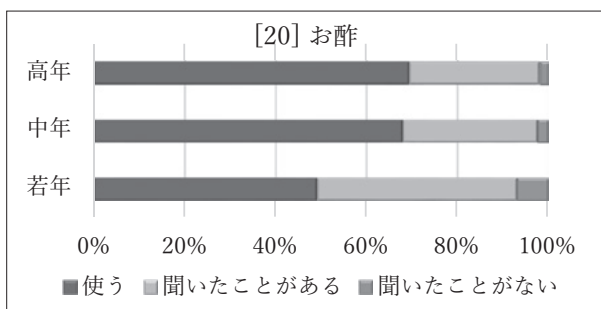
ここでは, 上記の現象が実際どのように観察されるかを鳥瞰するために, 筆者が2018年11月時点で検索・閲覧したブログ記事(Yahoo! ブログ)に基づき, それぞれの使用状況を簡単に確認しておく。

まず①であるが, 検索結果からいうと, 上記原則の「お和語」はもとより, 「ご漢語・ゼロ外来語」相当の語にも「お-」の接辞は必ずしも少なくない頻度で確認される。つまり井上(2004)のいう原則からは「お-」の汎用性が拡大し, 漢語や外来語に対してもそれなりに適用される傾向がうかがえる。一方, ②(「すごい+形容詞」)はその①にも増して使用の実態が顕著である。あてがわれる形容詞にもよるが, 検索結果において元来の「すごく-」を上回る件数のものもあった。よってこれはもはや誤用や派生の段階にはなく, 少なくともブログ記事内においては, 安定の状況にあることが推測できる。③も早くから現象が取り沙汰されてきたひとつであるが, 実際, 「食べれる」や「見れる」を検索語とすると, ブログ内でもかなりの頻度で用例が収集される。つまり各自誤用であることを認識しながらも, 一般の使用で特段のバイアスがかかることがなく, ②と同様, むしろ正規の活用形を凌ぐ頻度でこれらが用いられていることがうかがえる。対して④は, 検索にかければ該当のものは確実にヒットするが, その数は決して多いとはいえない。おそらくこうした使用が書き言葉にはあまり馴染まず, 主には口頭でのやりとりに現れうる言い回しであることが関係するのではないと思われる。

4.3 世代別状況

本調査では, 当節の最初に挙げた①~④の項目に関して, ①は大橋(2010)の調査にならって「使う・聞いたことがある・聞いたことがない」, ②③④は文化庁『国語に関する世論調査』の文法項目にならって「気になる・気にならない・どちらとも言えない」の3択で聞いている。グラフではこれらを凡例とし, 各比率を世代別に図示している。

以下, まずは①(接頭辞「お-」)について, 「お酢」, 「お



後特別なきっかけがない限り、「使う」や「聞いたことがある」状況を再生することは難しいのではないかと。ちなみに『世論調査』の「解説」には、近年「お」の付けすぎが話題になることがあるとあり、「お-」が乱立する傾向を体感的にみとめる向きの言及がなされている。しかし結論からすると、以後それは思うほどには“付けすぎることにならなかった”ことになる。この「お-」の乱立とおそらく同源と思われるものとして「過剰敬語（二重敬語）：おっしゃられるなど」なるものが最近、話題にあがることもある。いわゆる誤用の指摘とその戒めが話題の中心であるが、既注6に記した授業アンケートによれば、これの使用は若い世代でさほど目立つものとはなっていない。本調査の「お-」が示すような動きとあわせ考えると、その言語行為が過剰であることをみずからが自覚することがあれば、またそれが社会的あるいは世代的な認識として東になることがあれば、相応の自浄作用が働く可能性のあることを上記は示唆しているようにも思える。

紅茶、「おビール」の結果をしてみる。すると、いずれも上位世代ほど使用または認識の割合が高く、特に「お紅茶」、「おビール」では若年層との差が格段に大きく現れている。ちなみに井上（2004）も参照する『世論調査』（平成8年度）では、「使う」の割合であるが、お酢：33.7%、お紅茶：3.7%、おビール：2.5%となっている。また大橋（2010）の若年層では、「使う」+「聞いたことがある」の割合であるが、お紅茶：83%、おビール：68%（「お酢」のデータはない）となっている。これによれば、大橋（2010）の若年層^{註12}は、本調査の中年層あたりとほぼ一致し、おおよそこの世代までは使用または認識の傾向があること、一方でこれ以降の世代、特に減少幅が大きい「お紅茶」、「おビール」に関しては、主には「聞いたことがない」対象へと推移していく動きであったことがうかがえる。こうした状況ともなると、今

次に②（すごい+形容詞）の「すごい速い」であるが、これは「気にならない」が大多数を占め、世代的にも目立った差が現れていない。この現象については『世論調査』が直近の調査（平成23年度）で同じ文例を調べており、「（使うことがあるか）の問いに対する「ある」の割

合であるが), 約半数の48.8%が「すごい-」を許容している。大橋(2010)の若年層では74%が「違和感がない」と回答。遡って井上・鍵水(2002)には「埼玉県女子校生の7割使用(1987年)」、「東京・新潟間の中学生の調査では、大多数使用(1997年)」(p.106)とあり、この現象が首都圏を中心に、80・90年代には既に浸透があったことをうかがわせる。本調査の結果はつまるところ、それらの動きの延長線上にあるものと受け取れる。この調査に限らず、(たとえば参照する『世論調査』もそうであるが)、言葉の誤用や派生を調べる調査では、規範となる元の用法の変化形の適否が単独で問われることが多い。しかしグラフのような状況からすれば、回答者にとってもその間いだけでは聞かれていることへの合点がいかず、もはや「すごく-」と「すごい-」を対比的に見せられることによってはじめてこの問題の在りかが自得される段階にさしかかっているのかもしれない。

そうした観点で見ると、③(ら抜き言葉)の「食べれる」、「来れる」も似た傾向にあるといえる。一段・カ変動詞間の差はさほど大きくはないと見うるが、より割合が高いところで「来れる」を見ると、若年層の73%が「気にならない」と回答している。加えて「食べれる」、「来れる」とも、中・高年層が若年層からの落差をそれほど大きくは示しておらず、そのことがこの現象の浸透具合を一層強く物語っているといえる。参考までに『世論調査』(平成27年度)では、(使う活用形を選択するものではあるが)、各調査語で「-れる」の使用率が50%前後となっている。この比率は“使用”を問題にしているためにそうなのであろうが、井上・鍵水(2002)ではこの「-れる」が全国的に分布し、小説や流行歌にも用例が見られることが記されている(pp.235-236)。また佐野(2009)は会話コーパスをもとに「ら抜き言葉は急激な増加の段階にある」(p.356)と見ており、本調査結果がこれらの流れの中にあることをうかがわせる。ところで、既見の①では、いわゆる誤用に対する自覚がその為に自浄作用を生み、正用へと転換していく可能性について触れたが、上記に見られることは、逆に一度傾いた動きはなかなか歯止めがかかりにくいことの一例と受け止められる。当該の「ら抜き言葉」のように、言語使用の簡便さや合理性に関わるものは、「お-」の付けすぎといった過剰の言語行為(この場合は丁寧さの上乗せという心理背景からの現象)とはまた違った傾向性のもので働くことを示唆していると考えられる。

他方、④(さ入れ言葉)の「休まさせて」では、上記の②や③と異なり、「気になる」度合いが一気に増大している。中でも注目されるのが、高年層よりも中・若年層の方にその回答が多く、たとえば佐野(2009)が「さ

入れ言葉は急激な増加の前段階」(p.356)と予測しているのとは相違することである。この現象については、『世論調査』が平成8年度調査から平成14年度調査にかけて「気にならない」比率を大幅に下げていること(64.6%→36.7%)、平成27年度では「使う」比率へと見方が変わっているが、対象の語により20%あたりを前後していることがうかがえる。また大橋(2010)でも同じく、語により「違和感がない」比率が前後しており、『世論調査』などを念頭に「既調査からの飛躍的な伸びがあるとはみとめがたい」(p.27)と結論づけている。佐野(2009)が示すS字曲線がさ入れ言葉を「急激な増加の前段階」と予測したのは、おそらくはその分析対象が「話し言葉コーパス」であることに起因するものであろう。その点では、先に4.2節で推測した“主には口頭でのやりとりで現れうる言い回し”という「さ入れ言葉」の見立てはまさにそのとおりであり、特段にそのことを限定しない本調査のような条件下では、これ以降も、大橋(2010)の言葉を借りれば「飛躍的な伸びがあるとはみとめがたい」ものとして推移していくことが考えられる。

まとめ

以上、本稿では「はじめに」に記した(1)～(3)の現象について、先行の調査データを参照しつつ、各種媒体の実態調査および世代別のアンケート調査により、現状の把握とそれを生む背景、予測される今後の動きなどを考察した。それによれば、これらの変化がどのような方向にあるにせよ、多くは高年層から中年層、さらにそれよりは若年層と、世代を下って階段状の増減を示すものとまず大きく捉えることができる。その点では、やはり現在の若年層における実態が、これらの現象の今後を考えるうえで、もっとも重要なポイントになると位置づけられる。

一方で、それらは単に世代差として捉えられるばかりではなく、今ある社会情勢との関わり(たとえば「デイケアサービス」の社会的認知に伴う「ケア」の語の多用)や各個人の環境・習慣との関わり(たとえばどの形状に対し「(ペン)ケース/筆箱」を言い当てるかの個人差)、同じく属性との関わり(たとえば学校教育現場では「レジュメ」よりも「資料」が用いられやすいこと)などがあって、一律ではないこともうかがえる。また「接頭辞「お-」」の世代差に見られたように、過剰な言語変容は逆にそのことへの自省を促し、自浄作用として働きうる可能性があること、他方、「すごい+形容詞」や「ら抜き言葉」など、一度傾いた動きはなかなか制動が難しい実態も観察され、細かくは個別の現象ごとに、それに即応する形での動きや背景のあることもうかがえる。

松崎(1993)は本稿の(1)の問題について、『広辞苑』ほか17種の辞書を用いて実態を分析しているが、その大きな結論として「外来語音認定の問題は語例に何を挙げるかで大きく議論が左右する」(p.92)こと、よって「少数の語例から一方的な論を展開するのは危険である」(p.83)ことを指摘している。本調査結果から見える世代差や、社会・環境・属性などによる実態の差は、まさにそのことと連なるものといえるだろう。しかしこの課題は、論を多方向的に展開するにしても、結局は一つひとつの語例に立ち返り、調査を地道に積み重ねていくことでしか実態はつかみとれず、議論そのものが見通せないこともまた事実である。本稿はその一環としてのささやかな考察ではあるが、これを基礎として、またその結果から新たに必要とみとめられた視点を加味しつつ、今後も継続して調査を行っていきたいと考えている。

注

- (1)については、筆者が担当する「特定地域研究ゼミ」(2020年度)でも本稿と同様のアンケート(若年層対象)を行い、揺れが拮抗するものとそうでないものの傾向を把握している(たとえばコミュニケーション/コミュニケーションはコミュニケーションが100%となり、揺れが見られない)。本調査の項目の検討ではこれを予備調査と位置づけ、その調査結果を大いに参考にした。
- (1)～(3)については、文化庁『国語に関する世論調査』による経年的なデータの蓄積があるほか、大辞泉『ことばの総泉』のような大量かつタイムリーな情報配信もあり、特に参考になる。ただこれらは対象年齢が不特定であったり、一応の年齢区分はあってもその比率が不分明であったりするため、本稿が示すデータの傾向とは必ずしも一致しないところがある。参照の際はその点を考慮する必要があるが、別の見方をすれば、上記の大規模調査から見える大局的な動きと、本稿における世代別のデータが示す動きは、それぞれ相補的に意義をもたらすものであるといえる。
- 教育文化学部地域文化学科・学校教育課程の1～4年生で、大きな括りでいえば、大多数が文系分野の学生である。後の考察でも触れるが、調査の結果、項目によっては当世代(学生)の所属や学年といった要素が、使用する言語の選択に関与する可能性があることを事前に記しておく。
- Yahoo! JAPANが2005年より提供していたブログサービス。2019年12月15日をもってサービスは終了している。
- この分類では、1つの事象が複数の要素を併せ持ち、観点をずらせばまた異なるカテゴリーに分類されるものがある。たとえば⑦に分類する「ヴィジュアル/ビジュアル」は、本来⑤にもカテゴライズされるものであろう。しかしここでは単純に“視覚的な”の意味を担う「ビジュアル的」と、“バンド奏者の容姿”を想定した場合の「ヴィジュアル系」に差がありそうなことを捉えて⑦に分類し

ている。以下、この類の分類は同じ方針に従う。

- これについて少し補足しておく。まず③に関しては、この品目に関わりが深いと思われる店舗名やメニュー表、個人ブログでの料理記事などにスパゲッティの表記が多く見られた。④は出典(引用媒体)を示せばわかりやすいが、「贅沢保湿」なる形容のある商品はティッシュ、街頭配布のそれはティッシュといった、おそらくは質やグレードの違いに基づく表記の異なりが見られた。⑥も例示したものがその典型だろうが、ボールは球体、ボウルは料理器具専用といった表記のすみ分けが見られた(ただしボールゲームとしてのボウリングは連母音表記)。⑦は全般に音楽バンドに関連するものがヴィ、視覚的なもの一般に関するものがビとなる傾向がうかがえた。また⑧は、現在の教科書類が「ヒンドゥー教」で記載が統一されていることもあってか、筆者の50名規模の授業アンケートでは「ヒンズー教」を答える学生がいなかった。このことから特殊な事情に関わるものと位置づけた。
- i(使用割合の差が小さい)は、その数からも、全体の中では稀少なタイプといえる。また各例ともに「差が小さい」のレベルが数万件単位に現れており、実質的にはiii(使用割合の差が大きい)の1)ないし2)とは程度の差であるともいえる。
- 「シェア」には「共有」のほかに、「分配」や「占有率」の意味があるが、ここでは「共有」との対比において考える。
- これには「テレビ」、「バス」、「ガス」といった古くからの定着語も該当することから、「(比較的新しい語ではあるが)」というただし書きを入れておく。
- ①は、注7に記すような事情から、ここではとりたてては対象としない。
- 文法の活用や用法の変化を調査する際、④「さ入れ言葉」に対照させる形で「れ足す言葉」(行ける・書けるなど)が取り上げられることが多い。筆者も注6に記した授業アンケートでこれを扱ったが、結果として“気にならない”の回答が得られることは皆無だった。よって世代的な派生や浸透の事態はこの時点でみとめがたいと考え、本調査では「れ足す言葉」の項目を外すことにした。
- ここでいう「若年層」は、本調査時にあてがえば、現在35歳前後の層と見られる。

参考文献・URL

- 井上史雄・鎌水兼貴(2002)『辞典<新しい日本語>』東洋書林
- 井上史雄(2004)『NHK日本語なるほど塾11月号 近ごろ気になる敬語のはなし』日本放送出版協会
- 大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう
- 大橋純一(2010)「若年世代の言語動態に関する一考察」『ことばとくらし』22
- 小椋秀樹(2013)「大規模コーパスを活用した外来語表記のゆれの調査」『立命館大学』630
- 金愛蘭(2020)「語史 クレーム(苦情・文句)」『日本語学』39-2
- 佐野真一郎(2009)「現代日本語のヴォイスにおける進行

- 中の言語変化に関する数量的研究—「ら抜き言葉」,「さ入れ言葉」,「れ足す言葉」を例として—」Sophia linguistica 57
- 田中牧郎 (2013)「日本語の攻防 語彙 外来語とその言い換え」『日本語学』32-4
- 松崎寛 (1993)「外来語音の表記のゆれに関する定量的研究」『東北大学文学部日本語学科論集』3
- 宮島達夫・高木翠 (1984)「雑誌九十種資料の外来語表記」『国立国語研究所研究報告集』5
- 山浅舞香 (2019)『若い世代を中心に新しく生じている言語現象に関する研究』平成30年度 秋田大学教育文化学部地域文化学科 卒業研究
- 国立国語研究所「外来語」委員会 (2006)『外来語言い換え手引き 分かりやすく伝える』ぎょうせい
- 一般社団法人共同通信社 (2016)『記者ハンドブック 第13版 新聞用字用語集』共同通信社
- 朝日新聞社用語幹事編 (2019)『改訂新版 朝日新聞の用語の手引き』朝日新聞出版
- 松村明編 (2019)『大辞林第四版』三省堂
- 国立国語研究所「外来語」委員会『「外来語」言い換え提案—分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫—』<https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/>
- 文化庁『外来語の表記』https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/gairai/index.html
- 文化庁『国語に関する世論調査』http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/
- 大辞泉『ことばの総泉挙』<https://ssl.jpanknowledge.jp/daijisen/index.php>
- 一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会『外来語(カタカナ)表記ガイドライン 第3版』https://www.jtca.org/standardization/katakana_guide_3_20171222.pdf
- (以上, 最終閲覧 2020.11.30)